

# 九重火山の火山活動について(2001年10月～2002年1月)\*

Recent Volcanic Activity of Kuju Volcano (October, 2001 - January, 2002)

京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター  
Aso Volcanological Laboratory, Faculty of Science, Kyoto University

## 1.はじめに

九重火山通称硫黄山の噴火活動が1995年10月に始まって6年余が経過した。噴火当初は火山灰の噴出が数回観測されたが、その後は、常時水蒸気の噴出がほとんど変化せずに長期間継続している。

## 2.噴煙活動

噴煙活動は新旧噴気地域とも継続し、前回の報告時(2001年10月)時と殆ど変化ない。しかし冬期である最近はやや噴気量に減少が見られる。

## 3.地震活動

九重火山地域で現在発生している地震活動は、硫黄山付近と山体の西・北西地域の八丁原・筋湯・湯坪地域に震源域がまとまる。前回報告(2001年10月)以後、硫黄山付近では群発もなく日数個である。山体の西・北西地域では時折数時間に数十個の群発活動がその後も生じている。

## 4.地盤変動

星生山山頂を望む辺長測量結果によれば、1995年10月の最初の爆発から翌年4月までの急激な収縮があった。その後もこの収縮傾向は季節変化があるが依然緩やかであるが、ほぼ直線的に長期間継続している。現在までにすでに約80cm以上の収縮が計測されている。この傾向は、他の測線でも収縮の絶対量が異なるが、同じである(第1図参照)。

## 5.地磁気変化

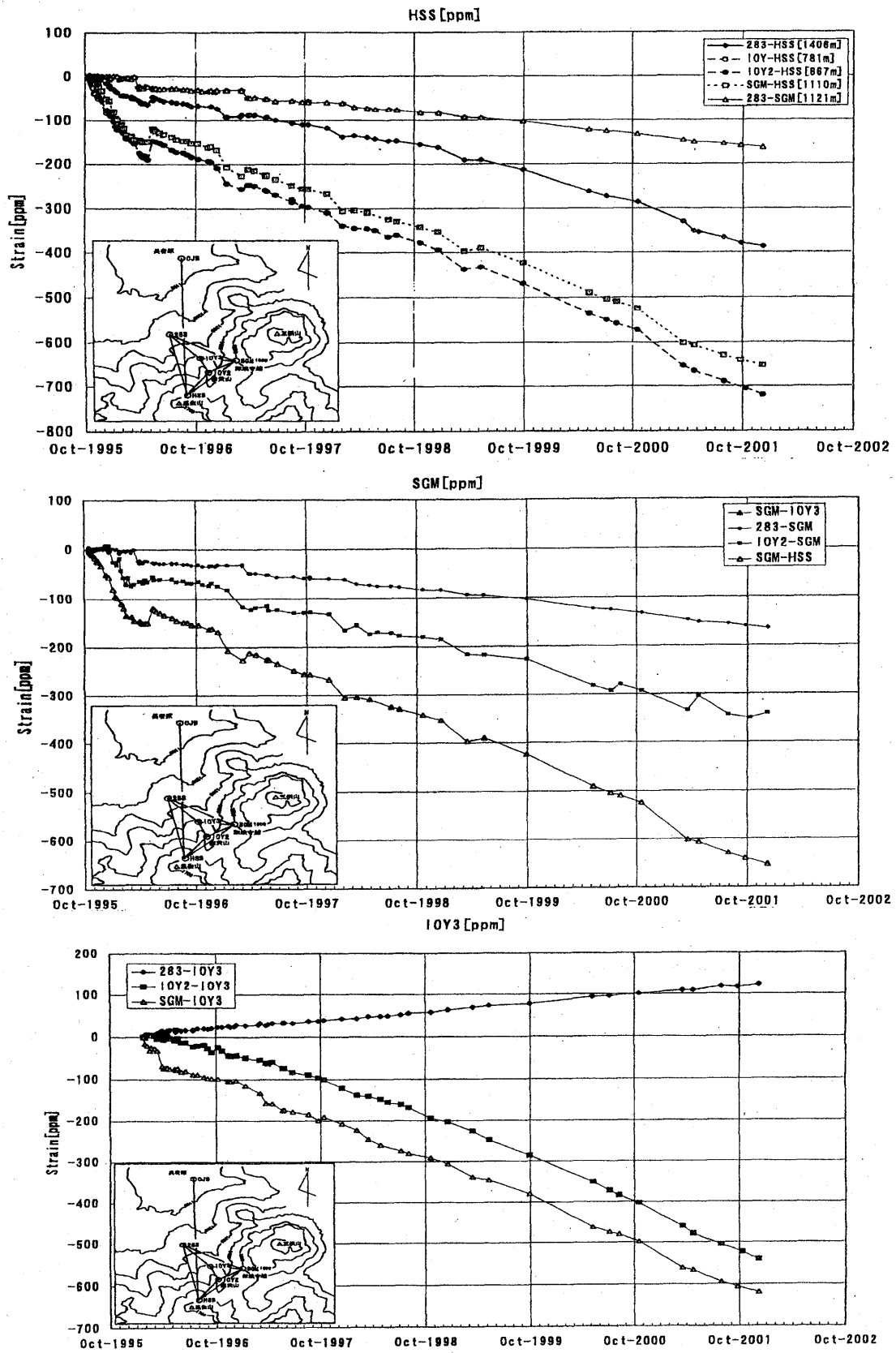
硫黄山の地磁気全磁力変化は観測を開始した1995年から現在まで、連続してほぼ直線的な変動傾向を示している。この変化は点源(もしくは球殻)を仮定すれば星生山の北東麓(従来噴気C領域付近)、深さ約200～500mを中心とした冷却帯磁で説明できる。この傾向は現在でもほぼ一定の速度で進行している。なお、白抜き四角は連続磁気点の近傍に設けた繰り返し磁気点における測定値であり、連続記録とほぼ同じ傾動を示している。図示した日値は、5分観測値から火山研究センターの値を差し引いた後、夜間平均(0時～4時)を求めたものである(第2図参照)。

## 6.まとめ

火口表面活動・地震活動・地盤変動・地磁気のすべてにおいて、前回の報告と同じ傾向が依然継続している。今後、このような傾向が直ちに止まるとは考えられない。

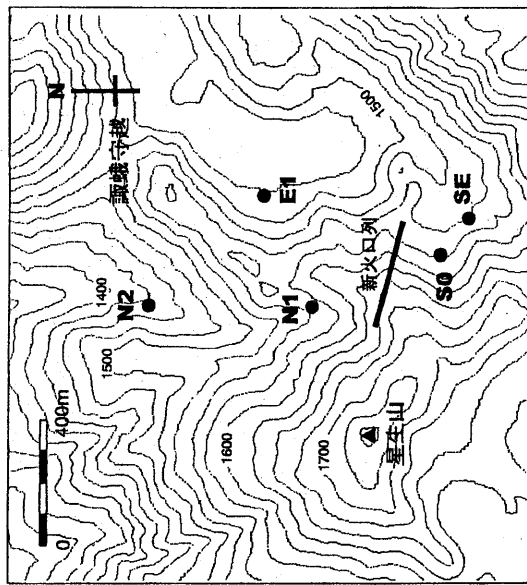
---

\* Received 24 Jun., 2002

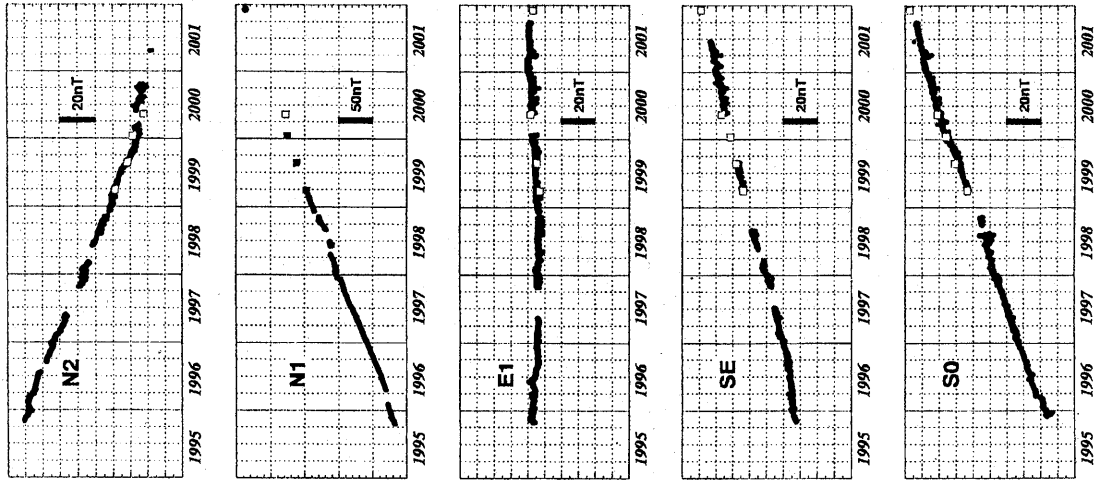


第1図 光波測量による斜距離変化  
 Fig.1 Changes of Distances at Io-yama Area.

九重火山における地磁気全磁力変化



京都大学大学院理学研究科  
九州大学工学部資源工学科



第2図 地磁気観測の結果  
Fig.2 Results of Geomagnetic Observation.